

里で創り出す『形』

山里での仕事は、やり遂げたとき何やら特別な達成感を感じるものと最近思うようになった。山の手入れ、道普請、炭焼き窯作り、農作業、郷土食作り・・・、数え上げるときりがないが、やり終えた後、ある特殊な感動を覚えるものなのだ。

筆者が属する角川里の自然環境学校では、今年、炭焼き窯作りに取り組んでいる。これは本当に手間がかかる作業だ。材料の調達からはじまって、その材料を加工し組み立てて窯にしていく作業、窯を取り囲む小屋作り、並行して窯に何度も火を入れて、内部の補修を繰り返すなど、多くの手順を踏まなければならない。また多くの仲間たちと共同で作業を進めていく必要もある。5月の連休中、こうした窯作りの材料加工に東京から遊びに来た方々にも参加してもらった。彼らには小屋の屋根を構成する木材の加工をしてもらったのだが、大変楽しそうに夢中で作業をしていた。作業後、彼らは汗を拭しつつ地元の方達と語り合いながら、自分たちで加工した木材の束をみて、ふと大切なことに気がついたように言った。「本当に達成感があるよな、普段の仕事で書類が完成してもこの感覚は味わえないよ。ここでは、やった仕事が決かな『形』として残るんだもの。」数日を経て、いよいよ窯の本体の作成に取りかかる。かつて炭焼きを業として仕事をされていたお二人のお年寄りが中心となって作業を進める。作業を進めるにあたってのコミュニケーションはとても緊密だ。それぞれの意見を言い合って、完全な合意に近いものになって初めて次の仕事に取りかかる。たとえわずかな水路掘りであっても石の積み方のちょっとした変更でも、しっかり議論した上で試行錯誤の中で作業を進める。そしてできた結果を見て満足する。このお年寄りの息子さんは「見ていると、俺がやれば10分くらいで終わってしまうような溝掘り作業も、ああだ、こうだといいながらもいぶんやり取りをして時間をかけてやっていたよ。しかし、その結果、本当にきちんとしたものができたようだったな。」と言う。

先日、ある農家の田植えを手伝った。山里の棚田での仕事は大変だ。基盤整備がされたところと異なり細かい作業が要求される。田植え機だけではすべて植えられないのである。お父さんは田植え機を運転して植えていく。植え残しを子どもたちやおばあちゃん、お母さんが植えて、おじいちゃんは、傾斜のある棚田で水漏れしないよう水路や畦の直しをしていた。まさに家族全員が作業

者である。ある時、田植え機が泥にはまって動かなくなってしまった。早速家族会議。ああだ、こうだと意見が出されたが、ようやくまとまり、結果として田植え機は救出され、目標としていた作業を完成していた。その日筆者もその家族と夕食を共にさせていただいたが、皆、満足そうだった。

確かに山里での仕事は忍耐がいるかもしれない。仕事自体手間がかかるし、多くの人々と共同で作業を行わなければならない。その際、何度もやり取りをしていかなければならない。このコミュニケーションは上意下達的なものではない。皆が対等な作業員だからだ。それに、その場その場で刻々と変化する自然条件の下での仕事は、マニュアル通りにはいかない。だからその場での判断をいちいち皆に求めなければならない。というわけでなかなか意見がまとまらないし、合意に向かうための手続きの煩雑さに閉口することもある。皆が「主役」というのもかならずしもよいことばかりではないようだ。ことによると、現代社会の早い流れについていくには不向きだということも言えるかもしれない。しかしその反面、スピードと効率性を要求される現代において我々が忘れてきている何かを思い出させてくれるようでもある。

筆者が属する自然学校では、実体のない名誉職などはいっさい存在しない。みんなが作業員だ。これが山里の流儀だから。それぞれ独自の役割を持ちながら同じ作業員として一緒に汗を流して仕事をし、終わった後は一杯やりながら意見交換を行う。その一連の手順が確かな『形』を創り出していくのかもしれない。

山里の仕事は、やり遂げた後の満足感が言葉に言い表せないほどすばらしい。なぜなら、山里の仕事は確かな『形』になるからだ。そしてその『形』とは、多くの人々が心を合わせようと努力し、同じ作業員（主役）として誠実に取り組んだ結果なのだろう。それがなくなったとき文字通り山里は消えてなくなってしまうのである。